

# 『日本永代蔵』巻四―「心を畳込古筆屏風」挿絵についての一考察

滝川 知佳

## 一 はじめに

井原西鶴（寛永十九年（一六四二）―元禄六年（一六九三））という作家の生み出した作品について、今までその成立過程や創作姿勢について、多くの先行研究がなされてきた。

それは、西鶴という作者が執筆した浮世草子が秀逸であるというのみでなく、俳諧の世界にも通じ、初期の作品については自筆の挿絵を付しているという点も、人々の興味や関心を引いて止まないのではないか。

ただ、時として、西鶴の作品には不可思議な点が存在することがある。

今回、卒業論文として取り上げた、『日本永代蔵』巻四―「心を畳込古筆屏風」の挿絵もその一つである。

まず、その不可思議な点について指摘する前に、『日本永代蔵』という作品について記しておきたい。

この『日本永代蔵』という作品は、貞享五年（一六八八）に西鶴の手により執筆され、西鶴町人ものの第一作目として出版された、全六巻からなる一大経済小説である。

『大福新長者教』という副題からも伺えるように、この作品に収録されている話は、成功談、失敗談という例示の違いはあったとしても、「どのような心構えでもって商売をするべきなのか」という一点に集約されている。

さらに作品に登場する主人公を始めとした登場人物達はその全てを虚構にはせず、一部の話に実在の人物を用いるなど<sup>(1)</sup>、その内容に現実味を持たせている。

挿絵は、『好色一代男』のように西鶴の自筆ではなく、挿絵を生業としている挿絵師、吉田半兵衛の筆であることがこれまでの先行研究において証明されており、吉田半兵衛は西鶴筆の作品においてはこの『日本永代蔵』以前にも、『好色一代女』、『好色五人女』などの挿絵を執筆し、『日本永代蔵』以前より作品の執筆者とその挿絵師としての関わりがあったことが指摘されている。

また、この『日本永代蔵』は、西鶴の人氣が最盛期であった時期に作成され大坂、京都、江戸の三大都市の書肆から出版されており、当時の西鶴の人氣の強さを伺わせるものとなっている。

なお、西鶴と書肆との関係性については、後ほど詳しく述べていきたいと思う。

その『日本永代蔵』の中でも、今回取り上げた巻四―二「心を暈込古筆屏風」は、商人の成功談と失敗談とに大きく二分されるこの作品の中でも、成功談として位置付けることのできる話である。

博多で貿易商をしていた金屋という商人を主人公としてこの話は展開されていくのだが、その本文中に挟み込まれている挿絵に本文と内容が食い違う不可思議な点があるのである。

挿絵と本文というのは、密接に結びついており、挿絵が本文と食い違うということは読者にその物語の内容を理解する上で混乱を生じさせてしまう要因になりかねない。では、西鶴はそうしたことを一切承知しないまま、この『日本永代蔵』を刊行したのだろうか。それとも、その本文との食い違いは故意に引き起こされたものなのだろうか。

これまで西鶴自筆の挿絵とされている作品『好色一代男』などについては考察されている先行研究も多数存在するが、西鶴自筆ではない挿絵については、未だ考察が加えられていないものも数多く存在している。

その為、書肆や挿絵師との関係性について触れたのちにこの『日本永代蔵』巻四―二「心を暈込古筆屏風」に存在する本文と齟齬のある挿絵の、その理由について考察を加えていくことで、西鶴作品の持つ別の側面について提示できればと思う。

## 二 井原西鶴と書肆、挿絵師

西鶴は、自身初の出版物として『生玉万句』という俳書が出版されている。これは西鶴が出版した初の俳書であり、江戸、京都など他の大都市より書肆の発展が遅れていた大坂の出版業界において、大

坂単独版としては最初期の出版物となった。

そして後に『日本永代蔵』を出版する際に、江戸、京都、大坂の三都の書肆のうち、大坂での出版を手掛けることとなる、本屋森田庄太郎とは、森田庄太郎が書肆を創業した初期の頃から西鶴との関わりが指摘されているのである。

つまり、西鶴は、大坂の出版界が発展を始めるのとはほぼ同時期に書籍の執筆を始め、大坂の書肆の歴史に初期からその名と作品を連ねており、大坂の出版書肆と共に発展したと見ることもできるのである。そして、森田庄太郎などの書肆と西鶴の関係性については先に記した事実に加え、商業主義的な出版の仕方を先導したのは書肆側ではなく西鶴自身であるとする谷脇説に代表されるような説<sup>4)</sup>もあり西鶴はただの作家として作品を制作するだけではなく、書肆と共に読者の存在を意識しながら書籍の装丁も含めて総合的に書籍を作成しようとしていたことが伺えるのである。

またこうした事実以外にも、西鶴と書肆の結びつきの強さを示すものが幾つか存在している。

その一つが、西鶴が作成した書籍に加えられている幾つもの書誌上の工夫である。<sup>5)</sup>

そして、工夫の最たる例として挙げることができるのが、『日本永代蔵』の巻末に付された『甚忍記』の広告である。

この巻末広告は、『日本永代蔵』最終巻である六巻の巻末、奥付の書肆名が掲載される前に本文と挟まれる形で記されている。

内容について詳細を掲載すると、この『甚忍記』の広告は、『甚忍記』という題の他にも、その書籍の内容を示唆させるような文とともに掲載されていた。まず、煽り文句として、「此跡ヨリ 人は

「一代名は末代」と記し、次に題名、そしてその左隣に「全部八冊」と冊数まで記されている。そしてその文の下部に「仁之部 義之部 礼之部 智之部 信之部」という五つの章立てが示されており、内容についてもかなり作りこまれていたことが伺える。

つまり、この奥付に付された内容からは西鶴が、浅井了意が記した先行作『甚忍記』という作品をもじった『甚忍記』という作品の構成についてある程度形にしていたことが推測できるのである。

「人は一代名は末代」と煽り文句のような一文が記されていること。そして、先ほど記したように『甚忍記』という題名の下部に、五つの章立てがなされていることから、先に記した推測に加え、おそらく西鶴は『日本永代蔵』の執筆を終え、書き上げたものを発表するべく書肆に渡した際には、既に『甚忍記』の大まかな構想を決めていたことが推測できるのである。

この『甚忍記』は結局出版されることは無かったようだが、この広告は他の書籍では見ることのできないものである。同時代の他の筆者の書籍では、巻末には出版年月と出版した書肆の所在地及び書肆名が書かれ、その他の文章が書かれている場合であっても、まれに本文の最後に付け加えるようにして何かしらの短い一文が添えられる程度であった。

それに加え、この『日本永代蔵』が江戸、京都、大坂の三都の書肆から出版されていることなども西鶴主導の理由として挙げることができるが、『日本永代蔵』が刊行された時期は西鶴が生涯で最も多く小説を書き上げた時期に作成された広告にもかかわらず広告内容が非常に細かく決定されていることも重要である。

こうした言わば繁忙期に、書肆側が広告を掲載するためだけに西

鶴に対して冊数や大まかな内容まで作りこませた作品を依頼するということはいささか考えにくい。ましてや、この『日本永代蔵』の出版を最後として、主体的に西鶴作品の出版から手を引いた森田庄太郎などの書肆が、これから発行される予定の作品をこのような形で掲載することを依頼するとは思えない。

そのため、この巻末広告はおそらく以前から温めていた構想なのか、それとも『日本永代蔵』を執筆していく中で思い浮かんだ構想なのかは分からないが、おそらく西鶴が新たな試みの一つとして書肆側に提案したのでろう。

つまり、『日本永代蔵』の巻末広告は書肆が西鶴に厳密な指示を与えて書かせたと考えるよりも西鶴が自身の判断でこの広告を掲載したと考えるのが自然だろう。

そして、こうした書誌的な工夫が『日本永代蔵』にのみ施されたものではなく、他の西鶴作品にも散見されることから西鶴がこうした趣向を好み、積極的に作品に取り込んでいたことが分かる。<sup>(8)</sup>さらに、西鶴独自の工夫は、本文内の挿絵そのものにも及んでいるのである。

西鶴が初期の作品においては自身で描いた挿絵を付し、さらに挿絵に描かれている事象から本文に示されていない事柄を読み取ることもできることはすでに指摘されていることに加え、挿絵の書肆的な面、つまり挿絵の挿入位置という細部にまで西鶴が書肆に指示を出していたことが広嶋進氏の『西鶴探究 町人物の世界』によって指摘されているのである。<sup>(10)</sup>

巻末広告などの当時としては珍しい工夫を書籍に対して施すためには、当然ながら書肆の理解と協力が不可欠なものである。さらに、

ある特定の書肆から出版された書籍にのみこうした工夫が施されている、というわけではなく、西鶴が作成した書籍全般にこうした西鶴独自の工夫が見られるため、特定の書肆独自の工夫ではなく、西鶴独自の提案であることは明白である。

これは、西鶴が書肆に対し優位な位置に立つほど西鶴の実力が周囲に認められていたということを示すと共に、わざわざ書肆に自ら指示を出し、それぞれの作品について挿絵の挿入位置や内容といった細部にまで造本について監督するほど本文以外の部分についても重要視し本作りを行っていたということの証明になるのである。

そのため、この『日本永代蔵』の挿絵に時折存在する、本文と異なる状況が描かれている挿絵についても、挿絵師と作者との間で誤解が生まれた末の産物というのではなく、何らかの意味が含まれていると見ていいだろう。

### 三 巻四―二「心を疊込古筆屏風」と昔話、諺について

挿絵について考察を進めていくために、ここでは挿絵の掲載されている本文について考証していく。

そこで、改めてこの『日本永代蔵』巻四―二「心を疊込古筆屏風」のあらすじを述べておきたいと思う。

この「心を疊込古筆屏風」は、主人公である金屋が一度は不運に見舞われ財を失うも、自身の機転と才智によって財を築くまでを描いた話であり、その語りは長崎貿易について述べる文章から、和人、唐人の商売方法の違いについての説明で始まる。そして、対比構造となっている説話を例に出し、商売人は客を騙すということをしてはいけない、正直でいなければならぬとその教訓を示す。そ

の後に博多に住む主人公金屋の物語が始まるのである。この金屋は、「一年に三度迄の大風」にみまわれ、資産を失ってしまう。その後、長崎で商売をしようと長崎へ行くも、才智があっても資金が足りずに行き詰まってしまう。そんな時、思うようにならぬことに苛立った金屋が以前懇意にしていた遊女、花鳥のもとを訪れると、そこには高い価値のある古筆切れが貼られた枕屏風が置かれていた。一目でその屏風の価値を見破った金屋は、なんとかその屏風を花鳥から譲り受けようと、策を練り彼女のもとへ通い詰める。そうして遊女のもとへ通い詰めるうちに、花鳥は金屋に対する情を示すために自身の髪を切っても惜しくないと思うほどにまで懇意となった。そして、花鳥から屏風を譲り受けることに成功した金屋は屏風を手都へと上り、その屏風を元手として見事商人としての成功を収めた。成功をおさめた後、再び花鳥の元へと赴き、花鳥を身請けしたうえで、必要な諸道具を何不自由ないようにそろえてやり、花鳥が心を寄せていた男に沿わせてやるのである。それを知った人々は、金屋のことを「一度は遊女を騙したが、これは好ましいやり方だ。その目利き、抜け目のない男だ」といって皆金屋のことをほめたたえたという。

この巻四―二「心を疊込古筆屏風」を考察していく上で、物語の内容に重点を置き西鶴が他作品より取り入れたと思しき趣向について論じている先行研究を挙げたい。

まず、浮橋康彦氏による『一目千両』とこの『日本永代蔵』巻四―二「心を疊込古筆屏風」を比較し、巻四―二「心を疊込古筆屏風」は『一目千両』を元にしたものであるとする指摘、そして岡田哲氏が指摘している「炭焼き小五郎」譚と巻四―二「心を疊込古筆屏

風」との類似点の指摘が存在する。

ここで、この両名の説で類似点が指摘されている各昔話について、『日本昔話通観』に収録されている昔話を基とし、『日本永代蔵』巻四―二「心を豊込古筆屏風」との共通点・類似点について浮橋康彦氏の論と岡田哲氏の論に基づいて『日本永代蔵』巻四―二に関わる部分のみ整理し直してみたい。

#### 『一目千両』

- ・女のもとへ通いつめ、富をなすための屏風を手に入れる
- ・『一目千両』の主人公である長男は、三度女を見たことにより零落してしまう。この三度と言う数字は『日本永代蔵』巻四―二の主人公金屋の零落する様子を表した一文「海上の不仕合一年に三度迄の大風」及び、金屋が発起する理由ともなった、蜘蛛が巣を張っている様子を表した一文、「三度迄難義にあひし」に通じる。

#### 『炭焼き小五郎』

- ・物の価値を知っている者、つまり『日本永代蔵』巻四―二では金屋、『炭焼き小五郎』では姫、と、物の価値を知らないもの『日本永代蔵』巻四―二では遊女花鳥、『炭焼き小五郎』では炭焼き小五郎が出会い、物の価値を知っているものが、物の価値を知らない者の元々所持していた物品を利用し、富を得る。

これらの指摘は実には的確である。しかし、ここで一つの疑問が生じるのである。

『一目千両』は数々の話型が存在するが、浮橋康彦氏が挙げているのは岩手県に伝わる、三人兄弟の長男が後継ぎとなるという昔話の中の一つの型である。この『一目千両』と「三人兄弟」の伝承が

複合し、長男が財を成して後継ぎとなる、という話の型は、他にもいくつか見ることができるのである。

ここで例を幾つか、先に比較した『一目千両』との相違点を中心として取り上げておきたい。

- ・一目千両の女を三回見に行き、無一文になった後、女に誘われ「三回も見たものは初めて」と、ほうびに思い通りのものが出るひょうたんをもらい、帰っていく。

・一目千両の女を三回見たところ、三回目になから「お前には実に驚いた。唯の一回でも見る人間はほとんどいないのに、お前は三回も通った。ご褒美にこのふくべをあげる。ほしいものがあつたら、このふくべを振り回せば、思う通り何でも出てくる」と言つて、長男は宝のふくべを持って帰った。

なぜ、西鶴はこのように数ある話型の中より、この二枚折の小屏風と紫の小扇を与えられ、屏風を立てて扇であおげば望みのものが出る、という話型を選んだのであろうか。

先に記した『一目千両』の昔話を比較してみても、「小屏風と小扇」を与える話型よりも、瓢箪やふくべといった、植物の実を乾燥させた加工品を用いる例の方が多くみられるのである。自身の創作物に対し、並々ならぬ情熱を注いでいた西鶴が、特に何の理由もなくしに知っている昔話の中から、適当にこの話型を選んだとは考えにくい。

これらの事実や疑問を踏まえ、この『日本永代蔵』巻四―二「心を豊込古筆屏風」及び挿絵について考察を進めていく中で、私は屏風がこの話の主人公である金屋が富をなすまでの鍵として非常に大きな役目を持つていることに着目した。

この巻四―二「心を疊込古筆屏風」の中で、屏風は主に次のような役割を担っている。

まずは、主人公である金屋に発見されることにより、主人公が富を得るための足がかりとなる役割。次いで、読者に対し、金屋は遊女である花鳥の元へ赴き遊びにふけている際にも、決して商売のことを忘れることなどなかったということ、金屋の才知を地の文で強調するのみでなく、金屋に実際に花鳥の部屋にある屏風の価値を見抜かせることで、より読者に対して金屋が商人としての優れた目と才知を持っていることを示す役割。

そして、このように話が展開する鍵となっている屏風と、主人公である金屋が商人であることを踏まえると、先に提示した『日本永代蔵』の巻末広告にあった作品『甚忍記』の元となった浅井了意が記した教訓書であり、人として守るべき道徳や仕事をしていく上での心得など、多岐に渡り例を示しながら説明している書物、『堪忍記』に繋がっていくのである。

その繋がりととは、『堪忍記』巻四「商人の堪忍 第十五」に見ることのできる、「商人と屏風とハ。すぐなればたてらずと云へり」という、諺ともなっている一文に代表される、商人としての心構えである。

この『堪忍記』の一文と、『日本永代蔵』巻四―二「心を疊込古筆屏風」との共通点は商人と屏風が同時に登場するという点である。一見薄い繋がりに見えるが、西鶴がこの一文を意識していた可能性をこれから示していきたいと思う。

まず、先に挙げたように、『日本永代蔵』の奥付に浅井了意著『堪忍記』の題名をもじり作品名にしたと思われる、『甚忍記』という

作品の広告を掲載しているということ。この『甚忍記』は未発表に終わっているが、内容がほぼ決まっていたであろうことが広告内容から伺える。そのため、西鶴が『堪忍記』という浅井了意の作品を明確に認識していたという証明の一例としてあげることができる。

また、作品を執筆する際に書肆へ頼み、資料を取り寄せることもあったという西鶴が、自身の次回作『甚忍記』の発想元となる『堪忍記』に記されている説話や浅井了意の著作に全く目を向けないということは考えられない。作品の題名という、重要な要素の土台として『堪忍記』を用いている以上、西鶴は自身の書きあげた本文と題名との主題に齟齬が出ないよう配慮したであろう。配慮を行わなければ、作品を読んだ読者に題名と本文とが統一されていないという印象を与えてしまう恐れが出てくるためである。そして、その配慮を行うためには、発想元とした作品の内容を正確に把握しておくことが必須となるのである。

これらの点より、西鶴が『日本永代蔵』執筆以前に浅井了意作品や『堪忍記』に触れていたことを伺い知ることができる。

では、西鶴が『堪忍記』を意識して執筆していたとすると、この本文と挿絵はどのような意味を持つことになるのだろうか。

ここで西鶴が『堪忍記』に目を通したことがあるという前提に基づき、この巻四―二「心を疊込古筆屏風」に登場する序文が、この『堪忍記』「商人の堪忍 第十五」に記載されている内容を指し示すように構成されているという点を指摘したい。

まず、この巻四―二「心を疊込古筆屏風」の冒頭には和人と唐人とを比較した一文が掲載されている。その和人と唐人の商売の様子について記載されている部分と、その行いを戒めている一文につい

て触れておきたい。

唐土人は律儀に、言ひ約束の違はず、絹物に奥口せず、葉種に紛れ物せず、木は木、銀は銀に、幾年か変わる事なし。只ひたすらこきは日本、次第に針を短く摺り、織布の幅を縮め、傘にも油を引かず、錢安きを本として、売り渡すと後を構はず。(中略)これを思ふに、人を抜くことは後続かず。正直なれば神明も頭に宿り、貞廉なれば仏陀も心を照らす。

この戒めの内容に通じる文が、『堪忍記』にも存在する。この文では、まず

世に人のいへる事あり。商人と屏風とハ。すぐなればたてらず云へり。まがりて国家の用をなす物ハ。釣と番匠の鉄曲子なり。勾りて害あるものハ。縫針と。矢筈。人の心ことさらに。奉行頭人の。掟は更なり。商人ハ利分をもとめて。世を渡り業とす。利分を得ずハ。いかでか世にたてらん。もろこしの。韓康伯が身を。ひそめ名をかくして。薬を市にうりつ。虚値をいはず。これも利分なくハ世に。飢へて死ぬべし。

と、商人はただ正直なのではないけない。商人は利分を追求するべきであるとしながらも、後の文で

その中に。利をむさほりて。物さし権衡枰の上に。いつはりをかまへ。ぬすミをする。あるいハよき物に。あしきをまじへ。あるひハよきをみせて。あしきを替わす。是誠の商人にあらざ。ぬす人といふ物なり。(中略)廿二段の算法あり。少しもたがふ事なきを。これを私にくらます物ハ。天地の冥慮にたがひ。行末久しかるべからず。

と述べて、例え利益を追求することを第一と考えるべき商人であつ

ても、人を騙し、盗みを行うような商売の仕方をすることは、「天地の冥慮にたがひ」としている。

また、商人は正直に商いをしなくてはならない、という戒めを讀者に提示するための文言を締める言葉として、どちらも神罰、仏罰による影響を記している。『日本永代蔵』では「正直なれば神明も頭に宿り、貞廉なれば仏陀も心を照らす」と記され、『堪忍記』では「天地の冥慮にたがひ。行末久しかるべからず」と記されている。内容自体はそれぞれ正反対の意味であるが、どちらも人の言動次第では神仏や天地から何らかの影響、罰を受けるということを述べている。

説話の冒頭に、こうした宗教的な観念である天罰を受けるということと、商いとをはっきりと結びつけて語る手法を取るという点も二作品の共通点として見るができるのである。

ここでさらに、本文との関わりのみでなく、主人公である金屋の人物造詣と『堪忍記』の関わりについても触れたいと思う。

この『日本永代蔵』巻四―二「心を豊込古筆屏風」について論じる上で、主人公である金屋の取った行動が問題となることがある。

高価な値のつくであろう貴重な屏風を、遊女である花鳥にその価値を知らせずに譲り受け、その後利益の一部を還元する、という行動は、商い人として見習うべき姿勢なのか否かという問題である。これについては、金屋は賢さと狡さの境目に立っているとする説もあれば、いささか問題であるとする説<sup>13</sup>など、諸説意見が分かれている。

だが、最後に世話になった花鳥に申し報いたとはいえ、それ以前に花鳥のもとにあった屏風の価値を花鳥へと告げず譲り受け、それ

を元手として財をなしたという事実は変わらず、この金屋の行動をそのまま町人の鑑として西鶴が想定していたとするのは、いささか問題があるように思われる。

しかし、この問題となつてゐる金屋の行動は『堪忍記』の一文「商人と屏風とハ。すぐなればたてらず云へり」という「商人と屏風とは、真つ直ぐなだけではやっていけない。時には自身の意を曲げ、意に沿わないこともせねばならない」という意味を持つ一文を挟み込むと別の側面が見えてくるのである。

まず本文中より読み取れる、金屋の商売方法、人柄についてまとめたいと思う。

金屋は元々は長崎からの輸入品を取り扱う商売をしていた商人である。手代を大勢雇うことのできるほどの大商人であつたが、一年に三回も船が大風に遭い、積み荷を海中へなくしてしまうという不幸に見舞われ、長年貯蓄した財産を失つてしまう。そして妻子とともに貧しい暮らしを強いられる。「空定めなきは人の身代我貧家となれば庭も茂みの落葉に埋もれいつとなく律の宿にして萬の夏虫野を内になし諸声の哀れなり」急に手掛ける商売も見つからず、自身の経験から子孫には船にかかわる商売はさせないと住吉大明神に誓言を立てる。蜘蛛が巣を張ろうと苦心している姿に「あれさへ心なかく。巣を掛けお、せて楽しむなれば況や人間の気短に物事打ち捨つる事なかれ」と感銘を受け、屋敷を売り払つた金を元手として再び商売を始めようとする。しかし、長崎で商いをする時期を見定めて身一つで長崎へ下り、市でどのようにすれば儲けられるのかということを人に劣らぬ知恵、才覚で知りながらも、長崎商いを行う小商人の取引高にも及ばないほどの資金しか用意できなかったためこ

れを行えず、輸入商として商売することすらできなかった。その後、思うようにならない商売に嫌気がさし、やけになつて一生の遊び仕舞をしようと訪れた花鳥のもとにあつた枕屏風が貴重な品であると見抜く。

こうした金屋にかかわる記述の端々からは、商売に対し実直な姿勢を見せる金屋の姿がうかがえる。

自身の過失ではない要因で財産を失ひ、茫然としつつも、蜘蛛の巣をかける姿を見て一念発起する。その後に行つた商売も、自身の家財を売り払い元手とし行うというもので、『日本永代蔵』内の巻三―三などに代表されるような失敗談のように人を騙すような商売でなく、真つ当なものであり、金屋は自分の力で再び店を建て直すとする非常に実直な人柄であつたことがわかる。

そうして読み解くと、最後の場面でも花鳥を慕う男の下へ書道具を揃えて縁付かせてやる場面は、罪悪感からの行動と見ることもできるのではないだろうか。

ここに至るまでの金屋の心情の推察と、先の『堪忍記』の一文と『日本永代蔵』巻四―一「心を疊込古筆屏風」の序文との内容が一致していることを踏まえて考察していくと、金屋の行動はまさに「商人と屏風とハ。すぐなればたてらずと云へり」という一文そのままの行動であるということをご指摘したい。

金屋の行動を『堪忍記』の一文に従ひ読み替えると、遊女から屏風を半ば騙すような形で譲り受けるという行為が「商人と屏風とハ。すぐなればたてらずと云へり」という一文の、商人は時に自分の意に沿わないこともしくはならないという部分を暗示してゐるのではないだろうか。金屋は自分から望んで遊女を騙したのではなく、



商売人として再興し生きていくためにはここで自分の信念、商人は正直な商売を行うものという自分の考えを曲げなければいけない、と判断し自分の意見を呑み込んだのではないだろうか。

つまり、金屋は「傾城をたらし」て屏風を入手した賢さと狡さの境に立つ人物ではなく、商人として自身の身を立てるために、商人として護るべき堪忍を貫き通した上で、人としての義理も通した商人の鏡のような人物像なのである。

#### 四 金屋の人物像と諺を踏まえた『日本永代蔵』巻四―二「心を畳込む古筆屏風」の挿絵の本文との齟齬について

ここで巻四―二「心を畳込む古筆屏風」の挿絵に描かれているものについて触れておきたい。

この挿絵には、まず画面中央にそれぞれ涙を流しながら別れを惜しむ花鳥と金屋の姿が見える。そして、金屋の手には花鳥から譲り受けた七宝つなぎの模様が描かれた屏風がある。画面左手には、その二人の様子を見守る遣手と禿の姿を見ることができ、花鳥と金屋と同じように、画面左下で別れを惜しんでいる様子の禿に対し、画面左上の遣手はそうした三人の様子を冷静な目で見つめている。

この挿絵は、別れの場面であるから中央の二人は泣いているという解釈をされているが、「商人と屏風とハ。すぐなればたてらずと云へり」という『堪忍記』の一文に則り解釈してみると、違った側面が見えてくるのである。

ここでは主に金屋の様子に注目したい。

先ほどの一文と先に記した鐘屋の人物像を踏まえてみると、金屋が折りたたまれたままの背丈ほどの屏風を持ち、画面の中央で泣い

ている様子は、金屋の行ったことが決して金屋の本意でなかったことを挿絵を用いて強調させるためなのではないだろうかと見ることもできる。

つまり、折りたたまれた屏風は本意でないことを示し、折りたたまれ、内に秘められた状態の金屋の心を暗示していたのではないだろうか。そして、その本意でないという状況から金屋や花鳥は泣いているのではないかと推測することができるのである。

金屋が財を成すための重要な鍵となった、古筆屏風に付された古筆切れを挿絵に表示させず、価値の高い屏風の様子が挿絵によって伝わり難くなる危険性を冒しても折りたたまれ、運ばれている状態の屏風を描いたと言うことは古筆屏風の価値の由来よりも屏風という道具それ自体を描くことに価値があったことが窺い知れる。

さらにこのように考えると、なぜ西鶴が数ある昔話の話題の中から屏風という道具が登場する話型を選び、また挿絵の中に屏風を登場させたのかという疑問に対する説明がつくのである。

つまり、西鶴は話の冒頭に挟み込んだ、『堪忍記』と類似の文章と、この屏風を持つている金屋の挿絵を挟み込むことで、読者に『堪忍記』に存在する、「商人と屏風とハ。すぐなればたてらず云へり」という諺を意識させ、連想させようとしたのである。

そしてその連想を基にして、読者が商人は商売をして利益を得るために、時として自身の意にそぐわないことをしなければならぬこともあるが、商人として物品と金銭のやり取りを行う客に対しては虚値を言わず、常に正直でいなければならない、という教訓をこの巻四―二「心を畳込む古筆屏風」を通じて伝えたかったのだろう。

では、なぜわざわざ挿絵に本文との齟齬を発生させるような形で

読者に暗示させようとしたのだろうか。

西鶴は初期の作品には西鶴自身で挿絵を付していた。絵の腕に覚えがあったためとも考えられるが、自費出版同然であった初期作品にも挿絵を付していたということは、挿絵が読者にもたらす効果を考えていたのだろう。

つまり、西鶴は挿絵の持つ効果を意識し、巧みに利用していた可能性がある。

そして、今まで本文と挿絵との描写の齟齬が指摘されている作品についても、ただの間違いなどではなく何らかの教訓が示され、諺、先の時代の教訓書に発想を得ている可能性があるのである。

注(1) その例として、巻二―「世界の借屋大将」の主人公藤市が挙げられる。当時藤市の始末話は大変有名であった。

(2) 水谷不倒氏の説が現在に至るまで定説とされている。

(3) 中嶋隆『西鶴と元禄メディア その戦略と展開』参照。

(4) 谷脇理史『出版ジャーナリズムと西鶴』『西鶴研究論叢』参照。

(5) 例として挙げた巻末広告以外にも『日本永代蔵』各巻頭に付せられた、各話の内容を暗示させるような四角い口絵も、書肆的な工夫として挙げられる。

(6) この時期、西鶴は『日本永代蔵』を一月に刊行した後に、二月、三月と立て続けて作品を出版している。

(7) 中嶋隆『西鶴と元禄メディア その戦略と展開』参照

(8) 『本朝二十不孝』などには目次の部分に口絵が配され、『西鶴諸国ばなし』には刊記にめでたい床飾りの絵をあしらうといった工夫がなされている。この奥付に絵を挿入するという工夫も、他の筆者の作品には見ることのできないものであった。

(9) 笹山彩子「水筋のぬけ道」考―挿絵から読み取れるもの―『尾道

大学日本文学論叢』第一巻 参照

(10) 広嶋進『西鶴探究 町人物の世界』参照

(11) 長友千代治「金銀万能丸」と『日本永代蔵』『近世文学俯瞰』参照

(12) 岡田哲「『日本永代蔵』の造形―連想の連鎖―」『國學院雑誌』第一〇

八巻一号参照

(13) 大藪虎亮『日本永代蔵新講』参照

## 引用文献一覧

『定本西鶴全集』第七巻（一九五〇年 中央公論社）

『井原西鶴集』三（『新編古典文学全集 六十八』一九九六年 小学館）

『浅井了意集』（叢書江戸文庫 二九）一九九三年 国書刊行会）

## 参考文献一覧

水谷不倒『古版小説挿画史』（『水谷不倒著作集』第五巻 一九七三年 中

央公論社）

羽生紀子『西鶴と出版メディアの研究』（二〇〇〇年 和泉書院）

谷脇理史『出版ジャーナリズムと西鶴』（『西鶴研究論叢 新典社研究叢書

五』一九八一年 新典社）

中嶋隆『西鶴と元禄メディア その戦略と展開』（一九九四年 日本放送

出版協会）

広嶋進『西鶴探究 町人物の世界』（二〇〇四年 ぺりかん社）

井上敏幸『元禄文学を学ぶ人のために』（二〇〇一年 世界思想社）

市古夏生「二都板・三都板の発生とその意味―西鶴本に即して―」（『国文』

第七十七号 一九九二年 お茶の水女子大学国語国文学会）

谷脇理史『『日本永代蔵』の方法と読者の問題』（『日本文学』第三二巻七

号 一九八三 日本文学協会）

檜谷昭彦「西鶴本と出版書肆——貞享五年の西鶴本」(『国文学解釈と鑑賞』第二四卷七号一九七九年ぎょうせい)

塩村耕「西鶴と出版書肆をめぐる諸問題」(『國語と國文学』七〇卷一一号一九九三年 東京大学国語国文学会)

長友千代治「西鶴と書肆と読者」(『元禄文学の開花——西鶴と元禄の小説——講座元禄の文学 第二卷』一九九二年 勉誠社)

浜田泰彦「日本永代蔵 作品の研究史」(『西鶴と浮世草子研究』第三号二〇一〇年 笠間書院)

塩村耕「西鶴と出版を考えるために」(『西鶴と浮世草子研究』第一号二〇〇六年 笠間書院)

速水香織「貞享・元禄期における三都の出版書肆 西鶴板元を中心に」(『西鶴と浮世草子研究』第一号二〇〇六年 笠間書院)

浅野晃「経済小説の光と影・日本永代蔵」(『国文学 解釈と鑑賞』第二四卷七号一九七九年 ゑようせい)

長友千代治「『金銀万能丸』と『日本永代蔵』」(『近世文学俯瞰』一九九七年 汲古書院)

塩村耕「浮世草子の挿画作製過程の一資料」(『近世前期文学研究』二〇〇四年 若草書房)

笹山彩子「水筋のぬけ道」考——挿絵から読み取れるもの——(『尾道大学日本文学論叢』第一卷二〇〇五年 尾道大学日本文学会)

箕輪吉次「『日本永代蔵』板下成立考」上・中・下(『学苑』第五一八巻)第五三二卷一九八三年 昭和女子大学光葉会)

信多純一「西鶴謎絵考」(『語文』三二卷一九七四年 大阪大学国文学研究室)

信多純一「古典と西鶴——『好色五人女』巻四をめぐる——」(『文学』第四六卷八号一九七八年 岩波書店)

信多純一「中世小説と西鶴——『角田川物かたり』と『好色五人女』をめく

て——」(『文学』第四四卷九号一九七九年 岩波書店)

若木太一「西鶴本の挿絵——『好色一代男』の模倣と創造——」(『講座元禄の文学 第二卷 元禄文学の開花——西鶴と元禄の小説——一九九二年 勉誠社』)

『日本昔話通観』(第三卷岩手一九八五年 同朋舎出版)

『日本昔話通観』(第二十三巻福岡・佐賀・岩手一九八〇年 同朋舎出版)

『日本昔話事典』(一九七七年 弘文堂)

『日本永代蔵(翻刻)』(一九九五年 おうふう)

浮橋康彦「西鶴と民話覚え書——心を疊込古筆屏風」と「小判は寝姿の夢」に関して——(『日本文学』第八卷一九五九年 未来社)

岡田哲「日本永代蔵」の造形——連想の連鎖——(『國學院雑誌』第一〇八卷一号二〇〇七年 國學院大学)

南陽子「俚諺調の文体——西鶴を中心に」(『江戸文学』第三七号二〇〇七年 べりかん社)

小川武彦「仮名草子と西鶴——『可笑記』の俚諺と『世間胸算用』の俚諺——」(『西鶴新展望』一九九三年 勉誠社)

守随憲治「日本永代蔵精講」(一九五三年 學燈社)

大藪虎亮「日本永代蔵新講」(一九三七年 白帝社)

江本裕「近世小説と挿絵」(『絵解き』日本の古典文学三一 一九八五年 有精堂出版)

石川了「挿絵作者としての西鶴——『五人女』巻一「舟行図」を中心に——」(『国文学解釈と鑑賞』第五八巻八号一九九三年 ゑようせい)

加藤良輔「挿絵を読む——『好色一代女』の図像学」(『日本文学誌要』第六号二〇〇二年 法政大学国文学会)